十九世紀リアリズムの異形の花・詩的リアリズム

川崎医科大学　外国語教室
永　末　和　子

(昭和63年10月13日受理)

Eine Erklärung der Eigentümlichkeit des deutschen Realismus des Nachmärz

Kazuko NAGASUE
Department of German, Kawasaki Medical School
Kurashiki, 701-01, Japan
(*Received on Oct. 13, 1988*)

概　　要

十九世紀後半のドイツ文学史には注目すべき風変わりな要素が二つあります。その一つは綱領主義者の動きであり，いま一つは定期刊行物の普及であります。後者のなかでもとりわけて家庭雑誌の急速な普及は綱領主義的文学の発展拡大に大変大きい働きを致しました。

家庭雑誌という特性が綱領主義的文学が図る方向づけとうまくマッチし，そのため，この両者のおさめた大変な成果とは反対に，両者の共演の多岐多様な効果がドイツ文学における本来的リアリズムの成長に害をもたらすこととなりました。この傷つけられた三月後期のリアリズムは様々な形容詞を常に伴い，決してこれなしで呼称されることはなくなったのです。

それ故にドイツリアリズム論争は生じますが，なにはともあれここに詩的リアリズムといわれる不透明な特異性を解明する手続きを，以上の視点のもとに開始する。

Zusammenfassung

In Der deutschen Literaturgeschichte im zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts treten zwei merkwürdige Elemente hervor. Das eine ist eine Bewegung des Programmatikers, und das andere ist die Ausbreitung der periodischen Literatur. Diese, vor allem das Familienblatt, hat in der Entfaltung der programmatischen Literatur eine große Rolle gespielt.

Der journalistische Charakter der Familienblätter fällt mit der Zielausrichtung der programmatischen Literatur zusammen. Deshalb im Gegensatz zu der großen Erfolg der beiden schadeten die multipelen Effekte des beiden Zusammenspiels der Entwicklung des eigentlichen Realismus in der deutschen Literatur. Der geschadete Realismus des Nachmärz trägt immer verschiedene Attribute und wird niemals ohne diese genannt.

Daher kommt Debatte des deutschen Realismus.Auf alle Fälle werden wir die unklare Eigentümlichkeit des poetischen Realismus aufhellen.

I

ルカーチはドイツのリアリズム文学の特異性を，「ドイツはなるほど天才的な作家をもっていたが，いまだかってゴーゴリからゴーリキーに至るロシア，デイドロからバルザックへ至るフランス，デフォーからディケンズへ至るイギリスがもったようなリアリスト的な発展を持たなかった」[1] と指摘しました。

恐らく，いわゆる「リアリズム論争」の最近の動向を知る人には，この引用はまたしてもルカーチであり，まだルカーチでもあろうかと思います。BRD におけるルカーチ受容の問題，東側諸国における社会主義リアリズムの運動とルカーチの関係，たとえばその一端の1956年 DDR でなされた「ルカーチ批判」(東側の運動について疎い筆者は最近では Hans-Jürgen Schmidt の 》Die Realismuskonzeption in den kulturpolitischen Debatten der dreißiger Jahre-Zur Theorie einer sozialistischen Literatur《 1976でわずかに知るのみですが)，そして西側で進むリアリズム論争と大変動きの激しい問題だからです。西側の論争は十九世紀の文学全般がリアリズムという名称のもとに発展していったことは異論のないところである以上，もっぱらドイツの発展はいかように明確にしうるのか，そもそも明確化できるのかという問題にしぼられます。この論争は1951年 Harry Levin の 〉What is Realism? 〈 という問いかけをテーマーに始められたシンポジウムをその先駆として，その後各地でシンポジウムが催され，その結果多くの成果が出版されましたが，Hugo Aust の 〉Literatur des Realismus 〈 に1976年までの主要な業績がリストアップされるとともに整然と詳しいので，詳しい経過は省略して，その結果の表面的な名称だけをたどりますと，まず論争以前から一般に通用しておりました poetischer Realismus（詩的リアリズム），Bürgerlicher Realismus（市民的リアリズム），literarischer Realismus（文学的リアリズム），programmatischer Realismus（綱領的リアリズム），更に最近，Roy C. Cowen が再び 〉Der Poetische Realismus 〈(1985) を出したという順序になります。

申し遅れましたが，ルカーチを冒頭に引用したからといって，ここで言われたことの正誤を問おうというものではありません。むしろある意味ではそれを承認することであり，またいっぽう強いて言えば，リアリズムという概念がルカーチのものと実際に十九世紀にドイツで実践されたものとが，どれほど掛け離れているかという点が鮮明にされ，その結果，そこに十九世紀のドイツリアリズムの特異性が明瞭に浮かび上がること，そのことによって詩的リアリスト理解に役立つこと，そこまでが狙いであります。

恐らく Cowen が再び poetischer Realismus を論議の俎上にとりだせた背景には彼自身その著書のなかで述べていますが，長い論争の間に洗い直された十九世紀をまとめて二巻本にした研究資料集 〉Realismus und Gründerzeit 〈(1975/76) の上梓によりますが，ここでは従来とかく等閑視されていた文学情況が明るみに出され，当時の文学理論，出版事情が一望できます。他方，二十世紀の文芸学者，文学史家によって黙殺された，というよりもむしろあまりに非文学的動機に富み，美学論的にはとるに足らぬと評価されての，いわば当然の結果として葬り去

られていた一群，Programmatiker，綱領主義者たちの存在，及び彼らの文学理論が Widhammer らによって照明を当てられ，1970年代のリアリズム論争の風となったこともあって，結果的に二十世紀のリアリズム概念から解放された。そのために詩的リアリズムの概念，あるいは詩的リアリスト概念が多少以前よりは明瞭となり，再び使用可能となったと言えます。それでは当時の文学運動の綱領とは一体どんな内容であったのか見ることにしましょう。

II

Poetischer Realismus という造語自体はシェリングによるとされますが，長年主唱者とみなされてきたオットー・ルートヴィヒは，十九世紀の主要な文学・政治雑誌の〉Grenzboten〈に数多く残されたユリアン・シュミットの評論が1970年に再発見されて，シュミットが主唱者であると訂正された。しかし，造語主のシェリングのほうはこの語を異なった脈絡のなかで使用しているので，問題視する向きもある。ルートヴィヒとシュミットの二人の間の概念には後程述べるがほとんど齟齬はない。従って，ここでは詩的リアリズムの主唱者シュミットの見解を取り上げるが，しかし，この詩的リアリズムといわゆる詩的リアリストと称される作家との関係は，同時代を生きたという以上のものは見当たらない。ただ，時代を同じくするということは同じ空気を吸うということを意味し，たとえ背を向けるにしろ，結局全く無関係ではありえないということになります。Programmatiker と呼ばれるシュミット一党に対する詩的リアリストたちの態度は，ただ精神的に距離を置くというだけにとどまらなかったようで，Cowen の前記の論文に述べられていますが，ルートヴィヒが詩的リアリストとも近付くことができたのは Programmatiker の本拠地のライプチッヒにではなく，ドレースデンに住んでいたということがその理由だと言われています。ルートヴィヒが彼らに影響を与えたかという問題については，彼が早期に，1865年に死亡したということを考慮に入れますと，後程も触れますが，ほとんど否定的といえます。Aust はルートヴィヒの文学理論と関係付けようとして試みられた論文の失敗例を指摘するほどです。筆者は前記の〉Realismus und Gründerzeit〈に掲載されたルートヴィヒの〉Der poetische Realismus〈を読むにすぎず，また，それは全文が掲載されているわけではないことを思うと断定は避けなければなりませんが，エーリッヒ・アウエルバッハのいう歴史のなかに身を置く同時代人の日常生活の現実を誠実に叙述するという模写を前提とし，そこに綱領の求める「道徳的で」，「快適で」，「健康的で」，そして「中庸をまもり」，社会や生にたいしては「肯定的」という絵に描いたような健全な市民生活を描出することが目的とされますと，現実と対決する個人，あるいは個性を，言い換えれば客観にたいする主観をフモールで統合しようとするヘーゲル美学に近い詩的リアリストとは異なると思われる。文学の生命の詩というものを内省的にとらえ，現実を見つめる目の確かさほど，それだけ詩に対する要求度が純化され，高められていったのに対し，またフモールがその詩の実現現場であったのに比べて，Programmatiker にとって詩は，ひとつの単なる便法，そのままではあまりに殺風景にすぎる現実を快適にみせるための手段であるのです。つまり，詩が現実か

ら読者の目を遠ざける方向に機能するのか，芸術家としての内なる欲求から，現実との嶮しい対立点で詩を持ち出してくるのかの相異であるが，その開きは甚だ大きいのです。

いよいよ，「文壇の教皇」といわれたシュミットの「詩的リアリズム」に直接する必要がありそうですが，その前に私共にとってなじみのあるリアリズム論をふりかえっておきましょう。ルカーチの見解を引用しますが，それにはひとつの条件があります。それは純粋の美学理論であるようなものは避けるということです。ドイツ文化を有機的に取り扱ったもの，文学の社会的使命を論じているものを選択するという条件です。なぜならば，これから問題とするシュミットら，programmatischer Realismus の概念で一括される一群の詩的リアリズム論は美学論風文学綱領ですから。もし彼らの論を芸術論あるいは美学論としてながめた場合，通俗的と一笑に付されることでしょう。

ルカーチは彼の文学史のなかで，「文学の偉大さと限界は，ドイツではなによりも，国家制度への対立によって規定されている。ドイツ文学が偉大なのは――たしかにあまりにもしばしば悲劇的な意味においてであるが――ドイツ国民の運命的な問題を理解したことによるのであり，その輝かしい時代においてまさにこの対立を深め徹底させたことによるのである。しかし，同時にその弱点もここに基づいている。ことにドイツの文化と文学の観念論的性格は，国家構造への対立の結果である」[2] 彼は国家構造という外部的圧迫とドイツ人に内在する，ほとんど自動的に自己規制にまわる内部的臆病（これを「俗物性」とルカーチはよぶ）の関係の図式のなかでドイツの文学史を照らし出します。十八世紀の「臣民の生活のほんの些細な現れにも干渉した，けちくさく全能な絶対主義の警察的圧迫に隠然とおさえこまれていた」[3] 時代の大胆な風刺作家，ラーベナーを例にとって，「ドイツは人を改善する風刺が自由に頭をもたげることのできるような国ではない。ドイツでは，私は，ロンドンでならイギリスの大主教猊下さえもが耳を傾けなければならないような真理でも，村の学校教師に告げることさえできない」[4] と発言するが，ただちに「あらゆる身分に愚か者がいるというのは本当だ。しかし賢明さは誰から誰まで批判しないようにと要求する。そうでなかったら私は，自分が最善の意図をもって役に立つ以上に，自分の性急さによって害を及ぼすことになろう。私は，恐れ多くも諸侯の玉座にまで迫ってゆき，上つ方の言動を厭うべき，または滑稽なものにしようと欲している人々の大胆不敵については，全く口にするのはやめよう。そしてもし，自分たちの暗い片隅から，全体の諸関係を眼の前にしている人々よりも自分たちは高い見方をしていると信じるのが，内心の傲慢さではないとしても，やはりそれははやまった熱意であって，何ものによっても許すことはできない」と，自己規制に変わるさまをあげる。このルカーチの指摘を念頭に置くとき，シュミットが文学綱領を以後述べるように掲げ，一時代の思潮に影響を成しえたかが納得いきます。それは不思議なまでにひどく衛生的な綱領なのです。

一八四八年の三月革命，すなわち市民革命が失敗に終わり，市民の胸に空虚感と絶望とがしみわたっているとき，この出来した事態を新解釈して見せること，いっぽう実は革命前に約されたことはいま着々と成就されつつあるとみせかけてやること，現在を全面的に肯定してやる

こと，これが「新」芸術を模索しなければならないと考えたときのシュミットの答えだったようです。彼が「新」芸術，「新」文学様式を提示するということは，「旧」を徹底的に否定するということでした。それが現実的に対処するということであり，建設的であることでした。シュミットの精神態度を Sengle の解釈に従いながら叙述する Cowen の記述を読むと，シュミットは，革命は「人間らしい世界の真の実現を願う空洞の熱狂」であったと述懐するルーゲースの意見を受けて，革命の失敗は，「理想主義の思弁の破産」であり，「空洞の熱狂」にすぎなかった理想主義の仮面が剝がれたことを示すものと考え，十九世紀精神界の所産である「実証主義のなにものか」へと変節してゆきます。こうして Programmatiker たちに代表される「リアリスティックな叙述」は現実の底に溜まる真実の究明に乗り出さずに，何か実証主義的なことへと向かい，そこにリアリズムの狭隘化が準備される。つまり，現実は手で触れるほどに「物性」(Dinglichkeit) を帯び，明白なものとなり，もはや世界は「意味」を問うものではなく，確かな物体，対象物となって，かってのように自然的なものと超自然的なものとの間に身を横たえることもなく，客観とただ観察する主観の間に存在するもののみとなります。従って世界はどのように構成されているかだけが問われ，抽出されることになります。

そこで彼が文筆活動を通じて行ったことは，三月前期の高揚した気運の文学の一掃であり，文学的伝統の廃除でした。それは苛烈を極めたので「皆伐」(Kahlschlag) といわれた。なかでもロマン主義者は病的な作家として彼の嫌悪の対象となったことは言うまでもありませんが，理想主義も感傷主義も同一視され，それは詩が病んだ状態ということになります。「理想は憧れのなかにのみ存在し，力のなかにはいません。ですから，気分が理想に向かうということは必然的に感傷的なものとなるのです。この感傷性が思想においても，詩作においても全時代の特徴である。シラーは詩の全歴史を素朴紀と感傷紀に分類した。しかしこの表記の選択自体がすでに感傷の立脚点を裏切っている。素朴 (Naivität) は〔すなわち，かかるものとして不審の念を惹き起こさせる飾らぬ自然のままのこと〕はただ感傷的な感受性にのみ存在する。」[5] これにひきかえ，当代の綱領主義的作家はこう賛美されます。「ベルトルート・アウエルバッハ，イェレーミアス・ゴットヘルフそして思いを同じくするその他の作家たちがシュバルツバルトやスイスの農村小説から掘り出してきた自然詩〔……〕は多様であるばかりでなく，ルソーがエミールで探し求めていたあの理想の自然とは真反対である。つまり，少なくとも勘によると，それはウエルテルやハインブントの「自然」と対立する。ちょうどあのシラーの抒情詩が，逃げ込んでいった近代化されたギリシャの理想とはまさに対立するように。」[6] ここでは芸術性よりもはるかに実証主義的なことのほうが優位におかれています。相変わらず繰り返し理想主義が排撃の的となり，しきりにゲーテやシラーを廃して，殊更に現状肯定の実証主義が上位に置かれようとされています。

市民の社会生活に関しては，現代の絶対的肯定，市民の堅実な生活と道徳性が称賛されますが，他方これとは逆に，懐疑をはさむ者，否む者は激しく攻撃されます。ゲーテやシラーの時代のドイツは乏しかったので，彼らはギリシャ文化に頼らねばならなかったが，それにひき比

べ，と前置きして，「我々はしかし，いまやはるかに恵まれた状態にある。もし，我々が癩病院かあるいは精神病院にいるかのように我々の現状を描いてみせるのであれば，彼らのほうこそが精神，及び心の形成上で時代から取り残されているということ，そのことだけがそこにあるのだ。より成熟した教養をもつ詩人であれば賛同し，リアリズムの原則にのっとったリアリズムの正しい使用法を行うでありましょう。そうして彼らは（この）理念と矛盾するものは決してリアルではないということを示すでありましょう。より高級な意図の痕跡は確かにもう至るところに見られるのです」[7] と，Cowen が「アジテーターの才」と評した面目躍如ですが，シュミットの強引さは文学史上まれにみる悪評を受ける結果となり，Widhammer はこの悪評を列記していますので引用してみますと，ヘッベルの「美学界の居酒屋政論家」，フランツ・メーリングの「芸術作品の精神的深みを解せぬ男」，ルカーチの「無知と美的感覚欠如」と散々です。[8]

しかし，詩的リアリズムの主唱者としてシュミットの考える詩とはいったい何なのでしょう。たとえば，ゲーテの『ウイルヘルム・マイスター』について，彼は，「この長編小説はドイツの社会を多面的に描こうと努力している。それがキマイラの王国に逃げ込むことなく，現実の生活を詩化しようとしている点でロマン主義者たちの試みとは異なる」[9] と述べます。詩化は美化，すなわち現実賛美の道具となります。そこで彼は，「それが同時に現実のなかでポジティーフな側面を探すならば，そしてまた古くはフィールディングやゴールドスミスのように，下ってはウォルタースコットや部分的にはディケンズもなお加えられますが，彼らの場合のようにそれが喜びと手を携えて生活にしっかりと結びつけられているならば，そうすれば詩のリアリズムは喜ばしい芸術作品へと発展していくでありましょう」[10] といいます。倫理的な，健康的市民生活を描出するための努力にもっぱら向けられます。しかし，さらに興味深いことに，この文はすぐにこう続いていきます。「しかしそれが批評やまじりっけなしの散文に余計な口出しをするならば，そのときには，それは美学的関係において喜ばしくないのと同様，道徳的関係においても有害な影響を及ぼすことになります。」「まじりっけなしの散文」とは政治的なこと，また度々皮肉っているゲーテの色彩論，植物論のように学問領域を指します。このように彼の詩の把らえかたを見ていきますと，詩とは社会批判的なこと，日常生活内の政治的なことを作家活動から除外することが暗に示され，一種の政治的意見表明となっています。つまり，具体的な市民の生活にどっかりと腰を据えた，現秩序の存続維持が支持されているのです。Cowen は「理想を喰いつぶしながら，リアリズムへと方向転換していった」と言いますが，ここのリアリズムはルカーチのリアリズムとなんと異なることでしょうか。彼は「既成の体制を擁護しようとする反リアリズムの，あるいは似非リアリズムの文学」[11] といっているのです。つまり，現実の実相，「リアリテートなもの」を故意にねじ曲げるか，もしくは見ないようにする文学は反リアリズム文学であるというのですが，この論文が書かれた年，1938年はナチズムの猛威に，トーマス・マンが亡命先を更にアメリカへと移した年でもあります。こうした背景を勘案しなければなりませんが，現実を透かしてみえるリアリテートを描出し，芸術作品と

することがリアリズム文学であることには変わりはありません。

紙面に限りがあり詳しく述べることはできませんが，ルートヴィヒの詩的リアリズム論は出発点がシェークスピア研究であって，社会史的，精神史的でなかったことや，彼自身が実作者であることもあってそれは創作のテクニック，シェークスピアの熟達した職人芸の「こつ」が主眼点となっています。そのため一見シュミットと異なるように見えるのですが，詩的リアリズムという綱領を掲げた文学運動のなかで実作にあたっているので，「技巧面」から生まれた理論と実践との間に亀裂が生じていることも事実である。そして実践でずれた分ほどその理論は詩的リアリストに近いのですが，だからといって彼らが彼の理論に大いに影響されたとは言いがたいのです。この理論は遺作として1874年に出版され，そのとき詩的リアリストは既に彼らの仕事を，後世詩的リアリズムと一括して称される仕事をめいめいが着々と進めていたのです。ただ，時代思潮として彼らを取り巻く現実であったことには間違いありません。それは歴史に打ち込まれた時代の方向づけの杭だったのです。少し話は前後しますが，詩的リアリストとここで呼ぶ作家というのは，代表的にゴットフリード・ケラー，テオドーア・フォンターネ，ヴィルヘルム・ラーベ，C.F. マイヤーが想定されております。誰を，何を詩的リアリストといい，詩的リアリズムと呼ぶかというこの論議こそ実に数十年にわたる論議であり，かつ未だ終結していない事柄であるので，これ以上立ち入ることは筆者には不可能ですが，前述したように，Widhammer らによる詩的リアリズムの提唱者並びに実践者を綱領主義者・Programmatiker として浮上させた結果，かえって明瞭さをました後世詩的リアリストと称される作家たちを指すということにしておきます。文学史家が時代を定義する際に，生産的な，歴史を押し進める傾向が内容と形式の主観化・個性化のなかに内在する独創的であること，すなわち創造的な人格とその世界観の独創性が独自の言語及び形式ともに到達しえた地点というのが価値判断の基準となりますが，しかし，この文学時期は表向き主流を占める思潮は，むしろ Novelle の動きに見られるように，独創性の失せた，ただ単なる形式の完成，名人芸の形式化へと凝固していったことを思えば，むしろ時代にあって主流でなかった作家群，しかも各自孤立的であった作家たちが詩的リアリズムという時代を特徴づける作家として後世評価されている点も文学史上特異な点であります。シュミットの提唱するジャーナリスティックな詩的リアリズムに囚われず，時代の風潮にも流されず，独自の創作を続けた結果であったのです。

しかし，この綱領主義者の動きが一時代を規定していくまでになった要素を次に考察してみましょう。

Ⅲ

作家が創作にあたるということはよく管理された無菌室で行われるのではなく，「生」を取り巻く雑多なひとつの時空間での行為です。先にも述べましたように，詩的リアリズムの時代（1848－1900年頃）は三月革命の挫折後の時代です。革命それ自体は不首尾に終わり，プロイセンの反動政策の強化と次第に自由主義的な風潮が後退していった時代でしたが，市民が大き

く躍進した時代でもありました。ことに1871年の普仏戦争の勝利後，資本主義の急速な成長とともに資本の担い手としての市民が中心となって行く時代です。経済社会の変化は都市への人口の集中化と工業のマスプロ化，それによる労働者・プロレタリアートの出現と社会構造も大きく変貌し，文学市場は市民がキーポイントを握る時代と様がわりします。これまでとは異なり，市民が作家の新しいパトロン，「メツェーン（Mäzen）」となったのです。この市民及び大衆の操作する資本主義の原則が出版界に影響を及ぼし，ひいては創作活動に関係してくるのです。十九世紀は著述によって日々の糧をうる従業者が激増した世紀で，こうした諸条件が市場を構成し，市場価値の高い作品と芸術価値の高い作品とが同一マーケットに置かれることになります。非文学的な諸要素に支配される需要と供給の関係と詩的リアリズムの打ち込んだ杭と，そしてこれから述べる定期刊行物による文学の均一化の傾向，そうした新しい実験が文学史上に行われたのです。

革命の失敗後，依然としてリベラリズムの楽観的な基調がなおも存続していたことは事実です。この「盲目的楽観主義・Hurraoptimismus」という正体のない存在は Programmtiker らの推進する現実肯定の文学を歓迎したことは説明を待ちません。ともあれ，この時代，本は貸本業者を通じて読者の手に届くのが普通でした。Wittmann の〉Das literarische Leben 1848 bis 1880〈によると，数十年にわたって実に読者の90パーセントが貸本業によっていました。ですから，この貸本制度を通じて出版者は読者の好む本を供給せねばなりません。すると当然，売れ行きが敏感に発行部数にはねかえってきます。どの作家のものがどのくらいの発行部数を示したかなどという具体的な数字は先の Wittmann の論文，ないしは Sibylle Obenaus の論文，ないしは Sibylle Obenaus の〉Literarische und politische Zeitschriften 1848-1880〈に詳しいので端折ることにしますが，フライタークやダーン，その他あまり価値のない作家がケラーやマイヤーよりもはるかに大きな人気を博し，ケラーやマイヤーもただ貸本屋の好みを受け入れたもののみ多く出たという事実が残っています。また，読者がいったいどのようにして作家の存在，あるいは作品の概要を知っていったかという過程にも，傾向を生む原因が潜んでいます。このための情報源は定期刊行物，なかでも「家庭雑誌」の役割が大きいのです。これら定期刊行物（内容は文学的なものとは限らず，商品のカタログであったりする）に作品の「予告刷り」がまず掲載され，そこで知った読者が，作品をのちほど手にするという経過をたどります。トップの読者を獲得していた家庭雑誌『Die Gartenlaube』（週刊紙）は1853年創刊で，1857年には60,000部，1861年は100,000部とのび，1875年には382,000の予約購読者がいた。二番目に有力であった家庭雑誌『Daheim』（週刊紙）は1846年創刊で，その年には既に24,000部，1867年には35,000部，そしてピーク時の1870年秋は70,000部の発行部数であったといいますから，家庭雑誌の普及ぶりが窺えます。このように急激に伸びた理由にふたつの主要な要素があります。ひとつは非政治的雑誌は政治的雑誌よりも郵税が安かった。このためにも家庭雑誌は意識的に非政治的であろうとした。いまひとつは安価本行商という販売システムにあります。これにより津々浦々，戸別に本が届けられ，いわゆる文学的生活というものが，国民的現象と

して一斉に花開いたのです。文盲をなくすという点では功績が大きいのですが，文学それ自体，また作家にとっては必ずしも歓迎してばかりしてはいられない事態を生みます。一家団欒の場で朗読されるにふさわしいこと，すなわち倫理的原則に抵触せず，政治色を帯びず，あらゆる集団，あらゆる階層，学問，教養のいかん，それら一切にかかわらず対象とすることにより生じる様々な制約を受けることになったのです。周期性，周知性，継続性という定期刊行物のジャーナリズムの特性は家庭雑誌が普及すればするほど，時空全体に対して方向づけを行うことを意味し，と同時に作家は既に獲得した読者の好みに迎合することが求められ，実際，編集者によって「調節」が行われるようになり，編集者の力が作家に対し増大する道を開きます。[12] 資本主義の原則が始動しはじめ，ここにかつてなかった不自由さが生じます。国家権力などという歴としたものではなく，人気という通俗な検閲の前に立たされたのです。作家は彼らの生活を確保するため，様々に作家同盟を設立します。著作権侵害に対する闘い，貸付け制度，名誉裁判の設置，それに年会の開催などが行われたのですが，しかし，内外に対する作家の利益代表となるはずであったものも実際は差し障りのない，決して結論をだすこともない，あい昧な「利益代表」であり，年会は宴会でした。こうした諸情勢のなかで各作家はその作家意識の質を自分に問い質す必要に迫られたのです。例えば，フライリヒラートは年会の招待を受けたのにたいし，「シュトゥトガルトであれ，ワイマールであれ，作家会議を開きたければ好きに開き，飲み食いすればよいでしょう。しかし，天才というのはいつも孤独なのだ！ただ孤高に創作し，一瞬の閃きによって生まれた一族を，多言を弄し，和気あいあいの気分で寄り合って祝宴を張る百万の空っぽの頭よりも遙かに遠く運ぶものなのだ」[13] と情熱的にはねつけます。いっぽうラーベは懸詞を駆使して，彼の作家感が溢れ出る断り状を書きます。「私見によりますと，作家の地位などというものは決してありませんし，将来も無いことでございましょう。ペンとインクで制作にあたるぼろを着た人間が作家であり，いつもそうでありましょう。貴兄がもっぱらそれを望むか望まないかそんなことはどうであれ。『非の打ち所のない』お方がずいぶんと『作家』と称したがっているようですが，それはそれで結構です。勿論のこと彼が文学的価値のあるものを何も生産できなければ，彼は作家ではないのです。私共は実にギルドではない。この世における私共の立場の利害，長短の一切はまさにこの一点にあります。ゲルマンの作家（＝Federvieh 羽根の生えた家禽，売文の徒）の普通のドイツ帝国シンポジウム（古代ギリシャの饗宴）は素晴らしいのですが，しかしプラトン的理念です。私共はそちらで会食いたしませず，永遠にめいめいで頂戴したいと存じます。そちらで市民（＝Philister 俗物，ペリシテ人・選民の敵）に選りすぐられた後，むんずと首をつかまれて，喉を切り開かれ，羽毛をむしられ，ゆでられ，焼かれるために，あるいはいわゆる我々の国民の大方の貧弱なスープに味をつけるために，はしご（＝Leiter 領袖）の桟にめいめい止まっていますし，これからもずっとそうです」[14]（　　）内は筆者註。ユーモアと諦めと皮肉が縦横に入り乱れて二重三重の意味となり，にわかに日本語に移しがたい内容ながら，ゲルマン民族というオーストリアを含む大ドイツの構想が消えた小ドイツのドイツ帝国の出現，注文の多い客の読者・市民，さ

らに国家権力，そうしたもろもろのさらし物としての，餌食としての作家，そしてぬくぬくとした流行作家の似非作家と，更にそのものから自己を峻別しようとする意識とが，そして物に対し屹立する気高さとが盛り込まれ，当時の良心的な作家の置かれた困難さがあらわにされます。彼らはその時代にあって小数派，異形の人であったのです。金銭的動機でなされる作家同盟にいわゆる大作家たちは否定的態度をとり，フォンターネははっきり「自助」の原則を掲げます。Cowen はその芸術家の責任意識の表明に驚嘆しつつ，しかし同時に市民社会からの詩人の孤立化，疎隔化に潜む危険を Wittmann の意見を引用しながら懸念します。「その危険は二十年後の『芸術至上主義』となって出現する」[15] と。そもそも詩的リアリストは新しく誕生した市民の自己認識のために文筆をとり，Martini が指摘するように，家庭雑誌は「お抱え家庭作家」と言われる一群を生み，市民のモラルを支持させはしたけれども，その独自なスタイルまで達して大衆言語を教養言語にまで涵養し，文学の「民主化」の動きはひとつの様式化を経験したと評価するほどに一種の啓蒙運動であった面を備えていたのだけれども，いまは隔絶を宣言するに至るのです。Wittmann は「リアリズムの大作家は泡沫時代の文学市場にただただ外面的に適応していくことができた。資本主義社会内において彼ら芸術家の自己理解は意識的な分離および孤立の烙印を押される。そういうなかにあって，世紀末の独我論者とははるかに異なり，社会的責任意識をいよいよ深くするのです」[16] と結論づけています。当の作家たちは読者に対する疎隔感と失望感を表明します。ラーベは流行を拒絶してぎりぎりの生活を強いられながら，後の世の読者のためにと不屈の詩人魂をあらわに創作を続け，やがて帝国主義への急傾斜がいやでも目立ち始める世紀転換期に入るや，現実を直視する思いに目覚めて，読者は帰ってきますが，しかし，概ね彼の同時代の読者に対する評価は，「願わくは，二度と再び私はドイツの物語作家としてこの世に生まれたくありません！一度の托身で十分です」[17] と失望の深さを隠そうとしません。かたや，当時の読者にたいして Cowen は「同時代人の人気は非常にしばしば文学史家たちによって恥辱であると受け止められます」[18] と付け加えます。

不屈の高い自己評価に辛うじて支えられながら，反比例する市民社会の通俗性，市民の価値判定無能力に孤立し，そしてここでは語ることのできなかった雑誌の看板のために独自のトーンを求められ，今日考える以上にその交流はタブーに近かった作家間関係の中で，各自が固有のトーンを磨き個別的存在としての作家として時代における異種であると共に，Programmatiker の運動により打ち込まれた時代の杭のなかで花開いていった文学の，リアリズム文学内の異形の花と二重に異形の荷を背負わされた作家活動は，ルカーチの指摘するドイツ人特有の民族性を底流に，歴史が市民の手に移行する過渡期の時空間のなかで執り行われた定期刊行物のマスメディアを媒介とするジャーナリズムの初登場に翻弄される文学史上のひとつの実験であったと思われる。

尚，本文中の人名のアルファベット表記のものは現在の研究家名。

註

1) G. ルカーチ：道家忠道／小場瀬卓三訳「ドイツ文学小史」 岩波現代叢書 東京 1965 S. 5
2) 同上：S. 4
3) 同上：S. 16
4) 同上：S. 16f.
5) Julian Schmidt: Die Reaktion in der deutschen Poesie 1851 In: C. S. 85
6) Ebenda S. 84
7) Julian Schmidt: Rez. Leo Cholevius, Geshichte der deutschen Poesie nach ihren antiken Elementen 1856 In: C. S. 70f
8) Helmuth Widhammer: E. S. 14
9) Julian Schmidt: 〉Wilhelm Meister〈 im Verhältnis zu unser Zeit 1855 In: C. S. 73
10) Julian Schmidt: Shiller und Idealismus 1858 In: C. S. 94
11) G. ルカーチ：「リアリズムが問題だ」(佐々木基一訳)『ルカーチ著作集 8』所収 白水社 東京 1969 S. 359
12) 編集者と作家の軋轢は例えば参考文献のAなどに述べられているが，Novelle 形式が流行すると，Deutsche Rundschau の編集者は C.F. マイヤーの戯曲の構想に対し，「たとえ，シェークスピアが訪ねて来ようとも，舞台のためにはどうぞ戯曲を，しかし，Rundschau のためには Novelle を！と言うでしょう」と返事する。その他，ハイゼの〉Kinder der Welt〈は口出しをされ，結局不評をかったこの人気作家の長編小説がもとで古参の新聞 Hande-und Spenersche Zeitung は廃刊倒産する。
13) Reinhardt Wittmann: Das literarische Leben 1848 bis 1880 (mit einem Beitrag von Georg Jäger über die höere Bildung) In: B. S. 221
14) Ebenda S. 221
15) Roy C. Cowen: A. S. 23
16) Ebenda S. 110
17) Wilhelm Raabe: 1884年，編集者 Grote 宛に書いた手紙
18) Roy C. Cowen: A. S. 23

＊上記の A., B., ……は下の参考文献を指す。

参考文献

A. Roy C. Cowen: Der Poetische Realismus-Kommentar zu einer Epoche, Winkler Verlag, München 1985

B. Herausgegeben von Max Bucher, Werner Hahl, Georg Jäger und Reinhardt Wittmann: Realismus und Gründerzeit Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1848-1880 Band 1, J.B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart 1976

C. 〃, Band 2, J.B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart 1975

D. Helmuth Widhammer: Die Literaturtheorie des deutschen Realismus (1848-1860), Sammlung Metzler Band 152, Stuttgart 1977

E. Hans-Joachim Ruckhäberle & Helmuth Widhammer: Roman und Romantheorie des deutschen Realismus, Athenäum Verlag, Kronberg 1977

F. Hugo Aust: Literatur des Realismus, Sammlung Metzler Band 157 Stuttgart 1977/1981

G. Sibylle Obenaus: Literarische und Politische Zeitschriften 1848-1880 Sammlung Metzler －Realien zur Literatur －Band 229 Stuttgart 1987

H. Hans-Jürgen Schmitt: Die Realismuskonzeption in den kulturpolitischen Debatten der dreißiger Jahre-Zur Theorie einer sozialistischen Literatur In: Realismus welcher? Hg. von Peter Laemmle, edition text + kritik GmbH, München 1976